

結結プロジェクト 2年間の成果報告会

「結結プロジェクト・ステークホルダーフォーラム」と称する成果報告会を2013年6月7日都内で実施した。2年に渡って取り組んできた「結結プロジェクト」の報告会であり、寄付金等のご提供や支援してくださっている企業・団体、個人の皆さまに報告を行うと共に、今後についてディスカッションする機会とした。

【主催者】 認定NPO法人 女子教育奨励会（JKSK）

【日時】 2013年6月7日（金） 15：00～18：30

【場所】 CULTURE 表参道

【参加者】 41名

【プログラム】

1. 主催者挨拶 JKSK 理事長 木全ミツ

東日本大震災からの復興は東北だけの問題では無く、全国の人が持っている能力を発揮して解決にあたるべき問題。志の高い女性＝問題意識を持ち、具体的な行動を起こす女性たちが2011年5/23日に10人が集まった。すぐに行動しよう、女性が牽引しよう、東京目線は止めようと「結結プロジェクト」と命名したプロジェクトがスタートした。2011年7月の亘理での開催を皮切りに、半年に一回、車座を開催してきた。現地に行ってみてわかったことは、東北の女性同士もお互いを知らなかったこと。被災地の女性たちの結、被災地と首都圏の女性たちの結が重なっている。JKSKの会員、そして協力いただいている個人、企業の皆さまのおかげで活動を続けてこられた。今後も復興を見届けるまで続けていきたい。

2. 結結プロジェクトのご報告 結結プロジェクト事務局長／株式会社クレアン 代表 菌田綾子

結結プロジェクト事務局長より過去5回の車座および結結プロジェクトの報告を行った。

10余人の首都圏在住の女性たちが集まり取り組み、東北の女性（一部男性も）を含め、その輪は164人まで広がった。5回目の車座で行ったアンケートによれば、「大いに成果をあげている」といった評価をいただいている。また、プロジェクト良い点として都市部と被災地の連携、女性が中心となっている、地域課題にフォーカスしている、スピード感などがあげられている。今後の期待として多かったのは、プロジェクト（車座の開催）の継続や、被災地のヘルスケア、メンタルケアなど。

これからも直面している課題を共に解決し、それぞれのプロジェクトが自立するところまで伴走していきたい。

1. 各プロジェクトのご報告

・松島宏祐さん（宮城県亘理町 わたりグリーンベルトプロジェクト）

今、東北で活動している20代、30代は本当に優れている。全国から移住してきた人も多い。ここ

から未来をつくっていききたいという人間が集まっている。2～3年後には事業として、東北からの新しい動きが目に見えるようになってくるはず。東北を助けるという観点ではなく、共に東北から何かをつくっていくという目で長く付き合ってもらいたい。

・吉田恵美子さん（福島県いわき市 いわきおてんとSUNプロジェクト 代表）

結結プロジェクトでの皆さんとの出会いにより、オーガニックコットン栽培が始まり、また活動の拡がりや財政的な支援につながった。地域の中だけにはできなかったこと、見えなかったことを、たくさんさせてもらっている。ぜひ未来につながる希望の事業、新たな産業として確立したい。

・太田美智子さん（宮城県石巻市 かじか村子ども王国プロジェクト）

里山で「本気で遊び、本気で学ぶ」活動を通して、災害時を乗り越えるコツや自然との共生などを伝えていきたい。

・古池さん（気仙椿プロジェクト）

これまで椿油を配合したハンドクリームなど商品開発を行ってきた。今後は椿を植え、種を集める住民参加の仕組みを作り、商品販売を軌道に乗せ、世界に広げていきたい

・山田好恵さん（宮城県大崎市 株式会社一ノ蔵）

石巻に住んでいるが、震災後、自分の仕事を通じて、被災地や社会の問題を解決するソーシャルワークにシフトした。働きながら、復興支援の活動を続けている。2年経った今こそ、被災者自らが情報発信をして、経済活性化に取り組む時期であると思う。

今年の2月ビオファニユールンベルグに参加した。ふゆみずたんぼのお米とお酒をもっていった。これを機に海外のオーガニック市場にふゆみずたんぼのお米とお酒を広めていきたい。また、いわきのオーガニックコットンで一ノ蔵Tシャツをつくることにした。今後も結結で学んだこと、縁をもらった人とご一緒に活動していきたい。十年後、一ノ蔵の商品を通して、希望を生み出す企業になりたいと考えている。

4. 情報発信「東北復興日記」の連載を通じて

・早川由紀美さん（東京新聞 社会部デスク）

・大和田順子（一般社団法人ロハス・ビジネス・アライアンス 共同代表）

・特派員（吉田さん、太田さん、山田さん）

早川：震災から1年経って、「3.11 後を生きる」という紙面を社会部で引き継いだ。それまでは記者を現地に派遣し、記事を集めてきたが、それからは「生き方を問い直す」内容の紙面にしている。JKSKからの提案はありがたいものだった。

大和田：このコーナーはプロジェクトに関わっている女性たちにとっても、自分の仲間が書いている、あの人は今どうしてる？ 私も頑張ろう！という気持ちになっていただけるのではないかな。今後も東北

の復興からこそ安心・安全でサステナブルなコミュニティ、未来の社会が創出されるという仮説に基づき、それを裏付ける取り組みを紹介していきたい。

・風評、風化について、

山田：隣県の宮城県も危険だと思われ、取引が無くなったところもある。

太田：実際のところ、まだまだ白石、栗駒、丸森など比較的線量が高いところもある。

吉田：東京と福島の記事と双方みられる場所に住んでいる。福島は今でも連日復興や原発、放射能関連を流しているが、東京はほとんどそうではない。ギャップがととても大きい。

早川：メディアはニュースというように、新しいことを報じるのが得意。一方で静かに朽ちていく、ほころんでいく、例えば関連死などについても耳をすまし、取りあげるようにしている。一方、結核プロジェクトのように、「ふっくら化」しているものも報じたい。

5. 実行委員からのリレーメッセージ

・河口真理子（株式会社大和総研 調査本部 主席研究員）

今日も東北の皆さんのお話を聞いて、エンジンはトップギアで走っていると思った。被災地のいろいろな話を聞いていると、人によって時間の流れが違うように感じる。

防災からすると3.11はすごく大きな事件で、海外では福島が今も注目されている。国内で風化が進んでいるかもしれないが、海外では依然注目が高いので海外の人や団体と一緒に行動することも一つの戦略ではないか。

・渡邊智恵子（株式会社アバンティ 代表取締役）

ゴールデンウィークに「わくわく・のびのび・えこども塾」を長野県の小諸で開催した。福島、埼玉、群馬にある児童養護施設の子供たち約90人を招待した。生きる力や衣食住の原点を知ってもらいたい。今回は藁の家づくりを行った。児童養護施設の子供たちなので、自分たちで家は建てられるという事を体験してもらった。子供たちの心よりどころになったように感じる。ボランティアや寄付によって実施できた。日本に寄付の文化をつくっていきたい。

・郡司真弓（NPO 法人 WE21 ジャパン政策提言部会 座長）

私はいわき出身で現在は横浜に住んでいる。震災後1～2か月はうつ状態になっていわきのことを話せない状況があった。私ができたことで嬉しいのは、吉田さんを第一回車座に連れて行けたこと。去年は仲間たちとボランティアでいわきの綿畑に何度も足を運んだ。2年たって、こんなに大きなプロジェクトになっていったことがとても嬉しい。生協やパルシステムなどにもつながりがあるので、吉田さんと一緒にオーガニックコットンTシャツの営業ウーマンとして動いていきたい。

6. 応援団からのメッセージ

・早稲田大学/W-BRIDGE 岡田久典さん

車座で出されたアイデアがほとんど実現している。このすばらしい取り組みを、今後は体系化

し、制度化や政策提言など色々な場所に適用できるようになることを期待している。

・サイボウズ株式会社 社長室 松村克彦さん

支援先に結結プロジェクトを選んだ理由は、①チームワークで活動している団体であること、②女性によるプロジェクト、③活動の軸を被災地においている、④柔軟でスピード感のある進め方、⑤まわりを巻き込む力、などである。

・三井物産株式会社 環境・社会貢献部 佐藤真砂美さん

かじか村こどもの王国プロジェクトを支援している。震災後、復興支援をしていったが、3年目に入り復興支援という特別な枠組みをやめた。これからは長期的に経済に巻き込み、地域に巻き込むなど、特別にするのではなく次の段階に入るところだと考えている。これからの未来をつくるもの、エネルギーの問題等も含め、持続可能な社会の実現という視野で復興支援を行っていきたい。

7. ワークショップ 進行:結結プロジェクト実行委員 大和田順子

結結プロジェクトのこれからについて、5つのグループに分かれ議論した。主な意見として女性はもとより、若者や男性、外国人の参画も促し、プロジェクトを通じてインクルーシブ・リーダーシップを育成することが提案された。また、福島の子供や、生態系の再生などグリーン復興に子供が参加できるプログラムの提案もなされた。

◆グループ1 (発表者:松村さん、梶田さん)

- ・2015年のビジョンは、「躍動感ある復興の踊場」、踊り場の「ふっくら化」(ぺちゃんこ→ふっくら化)
- ・JKSK モデルをつくろう。それは女性のリーダーシップ育成であり、若者や男性の参加も促すもの。インクルーシブ・リーダーシップ (inclusive leadership) で女性、男性、若者も一緒に！取り組む。

◆グループ2 (発表者:水本さん)

- ・負債を抱えてしまった福島の子どもたちに様々な機会とサポートを提供しよう。山村留学や廃校活用。企業の受入れ&教育プログラムなど

◆グループ (発表者:上原さん)

- ・津波被災地エリアの堤防計画に結結プロジェクトが「グリーン復興子どもプロジェクト」などを提案する。海外の力も活用する

◆グループ4 (発表者:平崎さん)

- ・車座の継続。プロジェクトを動画 (ビデオ) をつくってPRする
- ・大学や海外の学生を呼び込む。年代に合わせたボランティアツアーを企画する

◆グループ5 (発表者:古池さん)

- ・三陸地方に自生する「気仙椿」を世界に誇るブランドにしたい。住民全体でつくる事業 (プロジェクト) にしていきたいので、結結プロジェクトのサポートをお願いしたい